

新宿に乗り換えるまでに新鳥榮治に遇つた。

繪はがきに自分の詩を刷り込んだものを四五枚宛呉れた。

新吉はオンアボギヤをやつたり、勇ましく善之助と合唱したり、それから本郷元町で降りて、布施が行きつけの質屋で羽織か何かを置いて金を拵へて淺草へ乗り込む。

辻潤の行きつけのバーで酒をのむ。

そして観音様の裏を通つて、馬道の黒瀬の家へ行く途中に、新吉は布呂敷包みを紛失した。實に突つさの場合だ。

首に縛りつけてゐたのが、落ちたなど気が付いて願り返るともうなくなつてゐた。

新吉は夢中になつた。

中には観音經や萬年筆や、色んな新吉にとつては由緒深い貴重品が這入つてゐたのだ。

新吉は可愛そうな聲を出して「アレが無くなればオレは又氣が狂ふ」と言つて、疾走して活動館前の人込みを縫ふて、バーまで引きかへした。

其處にもなかつた。